

目上への「ほめ」行動について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27145

目上への「ほめ」行動について

人間社会環境研究科 研究生 楊 一林¹

<概要>

「ほめ」行動は相手を評価するという性質を持つことから、一般に、目上に対する「ほめ」は日本社会において一定の配慮や制限を課せられる。しかしながら、日本語母語話者にとって、目上に対して何らかの肯定的なコメントを述べること自体、むしろ必要とされる行為であり、ある意味では目上への「ほめ」は、「しないで済ませることができない義務」という側面もあるように思われる。

目上との関係は決して一様なものではない。例えば、学生にとっては目上である大学教員との関係にもさまざまなケースがありうる。そうであれば、目上とのさまざまな関係によって、その間に生じる「ほめ」行動にも違いが見られることが予想できる。「親疎関係」および「利害・評価関係」という2つの要因の組み合わせにより、さまざまな関係が想定可能である。そういういたさまざまな場面での「ほめ」のあり方について注目した研究もする必要があろう。

本稿は、上記のような研究を実施するための出発点として、目上への「ほめ」行動についての先行研究を批判的に概観し、問題の所在を明らかにする。その問題点の一つとして目上とのさまざまな関係が十分に考慮されていない点が指摘できる。このような問題を適切に扱うための調査方法を提案する。

<キーワード>

目上、ほめ行動、親疎関係、利害・評価関係、ストレートほめ、間接ほめ

¹ E-mail: yangyilin1020@live.cn

<目次>

1. はじめに
2. 先行研究の批判的検討
 - 2.1. 「ほめ」とは何か
 - 2.1.1. 「ほめ」の定義
 - 2.1.2. 「ほめ」の機能
 - 2.1.3. 「ほめ」の対象項目
 - 2.1.4. 「ほめ」とポライトネス
 - 2.1.5. 「ほめ」の役割から見るジェンダー差
 - 2.2. 対照言語学から見た「ほめ」行動
 - 2.3. 日本社会における「ほめ」行動に関する研究
 - 2.3.1. 川口・蒲谷・坂本（1996）
 - 2.3.2. 大野（2003; 2005; 2009a; 2009b）
3. まとめ

参考文献

1. はじめに

敬語にとどまらず、待遇表現としての「ほめ」行動は、相手と円滑な関係を保ちながら、相手への理解や賛同を表明し、相手を心地よくさせる機能を持つことから、ポジティブ・ポライトネス (positive politeness) の重要なストラテジーの一つとされる (Brown & Levinson, 1987)。また、相手を評価するという性質を持つことから、目上に対する場合は配慮や制限が課せられる。

しかし、大野 (2003) によれば、相手が目上であっても、方法や表現形式の工夫によって「肯定的評価」や「好感情」の伝達が可能になるとという。そこで、本稿では、この大野の研究を批判的に検討することから始める。

本稿では、大野 (2003) を始めとするこれまでの研究において、目上との関係が十分に考慮されてこなかったという問題を指摘する。例えば、学生にとって目上である大学教員も一様ではない。その間の関係について、「親疎関係」と「利害・評価関係」という 2 つの要因の組み合わせに基づいて詳細に分析すると、教員と学生との距離は様々であり、その間に生ずる「ほめ」行動にも違いがみられることが予想される。そこで、目上との関係を「(週 3 ~ 4 回以上会い、気軽に言葉を交わせる) 親しい人」、「(週 1 回程度しか会わず、言葉を交わすことがほとんどない) あまり親しくない人」、「そのどちらでもない人」などの「親疎関係」という要因と「評価する立場にある目上」、「評価する立場にない目上」などの「利害・評価関係」の要因に分け、それぞれの組み合わせから可能な人間関係を想定し、それぞれの場合の「ほめ」のあり方について調査・分析する研究を提案する。

2. 先行研究の批判的検討

2.1. 「ほめ」とは何か

2.1.1. 「ほめ」の定義

「ほめ」は、「肯定的評価を伴う支援行為」(熊取谷, 1989)、「感情伝えの理解要請行動」(川口ほか, 1996)、「認可・同意行動」(田辺, 1996) など様々に定義付けられてきた。さらに、大野 (2003) は「ほめ」行動の定義を以下のように簡潔かつ適切に述べており、「ほめ」を「相手自身、あるいは相手に関連する『よい』と認めうるものごとについて、明示的

あるいは暗示的に肯定評価を与えることによって、相手への好感情を表す言語行動」とした（大野, 2003:337）。本稿ではこの大野（2003）の定義に倣る。

また、大野によると「ほめ」行動に関する表現は三段階類型の構造をもつ。第一段階では、何か強い感動を受け、それが核となり、それをそのまま表出する表現である。例えば、「すごい！素晴らしい発表だった。君はすごいね」。第二段階では、メタコミュニケーション的に積極的に認めたり、同意したり、評価したりする行為としての表現である。例えば、「君は今回の発表者の中で一番優秀だな、それは誰も否定できないだろう。」第三段階では、認知や評価によって引き起こされたほめる行為が称賛、依頼や励ましなどさまざまな形態に変化し、間接的なほめ言葉に発展する。例えば、「来月の卒業発表、楽しみだな、期待しているよ。」というものである。

2.1.2. 「ほめ」の機能

「ほめ」の機能もまた各研究者によって様々なレベルで論じられている。

Herbert (1990)は「ほめ」の多機能性を主張し、Wolfson (1983)は「ほめ」が祝い、謝罪、感謝、批判の緩和、会話開始、皮肉、依頼の成功といった、他の目的を達成するための支援的行為として機能していると論じている。しかし、「ほめ」が基本的に発信者と受信者の人間関係及び連帯感の維持・強化といった社会的潤滑油 (social lubricants) としての働きを主機能とする点については、多くの研究者間で一致が見られる。

他方、「ほめ」の主機能自体に明らかな日米差があると見る研究もある。日本語の「ほめ」の目的が発信者と受信者との「上下関係確認」にあることに比べ、米語の「ほめ」は人間関係上の距離縮小を目的とし、「仲間意識・連帯意識を確認する」ことに重点がある（東, 1994: 125）。

しかし、「上下関係を明確にする」ことも「仲間意識・連帯意識を確認する」ことも、いずれも結局は発信者—受信者の人間関係を確認・承認しようという目的においては共通している。どのような言語表現や態度が人間関係を円滑にするかはその言語圏の文化や社会によって異なり、「ほめ」はこうした文化・社会の持つ価値観背景を映し出す鏡でもある。このような立場から本稿では、「ほめ」の主機能が「社会的潤滑油的な働き」（Holmes, 1995: 447）であるという主張に賛同したい。

2.1.3. 「ほめ」の対象項目

Wolfson (1983) は米語での「ほめ」の対象項目は、外見（所持品を含む）と能力（技術、才能、人格、嗜好を含む）が 2 大主要項目であると述べ、Holmes (1986, 1988) はニュージーランド英語の「ほめ」の対象項目種類が米語と明らかに同じ傾向であると確認した上で、外見と能力・能力の結果が約 8 割、その他に所持物や性格という項目があると述べている。

日本語での「ほめ」対象項目については熊取谷 (1989) が①才能・知識・技術、②容姿・服装・所持品、③努力、④性格の 4 カテゴリーをあげている。また、大野 (2003) は日本語の「ほめ」の対象が外見、持ち物、才能・達成、性格・行動、人そのもの、作品、家族等に分けられると述べている。カテゴリーの分類方法に研究者間の多少の違いはあるものの、日米の「ほめ」行動における「ほめ」の対象項目の種類自体に大きな差は見られない。

2.1.4. 「ほめ」とポライトネス

「ほめ」行動は、他者に承認されたいというポジティブ・フェイス (positive face) に配慮したポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの一種であると考えられる。Brown & Levinson (1987) が提示している 15 のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーから、特に「ほめる」という言語行動に関係していると思われるストラテジーについて検討していく。

下の Strategy 1 では、相手に気づいてほしい、認められたいという欲求を満たすというポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを挙げている (Brown & Levinson, 1987: 103)。

Strategy 1: Notice, attend to H (his interests, wants, needs, goods)

- (a) Goodness, you cut your hair!
- (b) What a beautiful vase this is!

例文を見ても分かるように、相手の変化や持ち物に気づき言及することは、しばしば「ほめる」という言語行為につながる。更に、Strategy 2 では強調したイントネーションを伴う発話を例に挙げている (Brown & Levinson, 1987: 104)。

Strategy 2: Exaggerate (interest, approval, sympathy)

(a) What a fantastic garden you have!

以上の Strategy 1 と Strategy 2 により、「ほめ」行動はポジティブ・ポライティネスの中でも最も顕著なストラテジーだと考えられる。

2.1.5. 「ほめ」の役割から見るジェンダー差

Holmes (1995)は「ほめる」(compliment) という行為の役割を主に次の二つに分けている。(i)「情緒的」(affective) また「社会的」(social) な役割, (ii)「指示的」(referential) または「有益的」(informative) な役割である。(i) が「ほめる」行為の主要な役割であり、話者と聞き手との間の連帯感を高め、または強化する働きのあるポジティブ・ポライティネスである。Holmes によれば、女性は(i) の役割においてよく相手を「ほめる」が、男性は(ii) の役割において「ほめる」という結論に至っている。女性は「ほめ」行動を人間関係を円滑に進めるための手段として活用していることを確信しているようである。つまり、「ほめ」言葉は、多くの女性にとって人間関係を円滑に進めるための潤滑油だと考えられる。

瀬田・木田 (2008) は、次のように指摘している。一般的傾向として、「ほめ」行動は、女性に「本能的」に備わっている行動であるため、当然女性はそのような行動をすると考えられるのである。女性にとって「ほめる」行動は、「抵抗なく」できる自然な行動ではないかという解釈ができる。しかし、「本能的」に備わっていない男性は、「ほめる」行動を自然に行うことができない。したがって、「ほめる」ことに「抵抗」があり、「ほめる」にはさらに「ワンステップ」が必要なので、「一歩踏み出さ」なくてはならない。そのような「抵抗」があることを顕著に表しているのが、「ほめられた」時の反応である。それらは、例えば、「ふざける」、「固まる」、「思考停止」等「ほめられる」際の困惑を表現する言葉から分析できるであろう。

以上のように、「ほめ」行動のジェンダー差は他の言語行動より顕著であることが予想される。

2.2 対照言語学から見た「ほめ」行動

大滝 (1996) は「どの場面でも、お気付きのことと思うが、ドイツ語には、日本語のような固定したニュアンスを表す一六種類の文型はない。その代わり、場面に適したニュアンスや丁寧表現自分で作り出さなくてはならない」と述べている (大滝, 1996 : 47)。

日向（1996）は日本語とポルトガル語の「ほめ」行為の対照分析によつて、ブラジル人は「日本語の感謝の相手である先生への『ほめ』言葉が、無評価的、全面肯定的、または低姿勢的であるのを見て、それを『謙りすぎ』、偽善的、お世辞と見なしてしまう傾向にある」と述べている（日向, 1996: 58）。

大浜・王（2006）では、食事に招かれた際の言語行動に関して、日本人と台湾人にどのような言語行動上の違いがあるのかという問題を検討し、「事実に忠実な発言が他者を傷つける可能性がある場合、概して日本人は事実に反した発言をしやすく、台湾人は事実に即した発言をしやすい」という調査結果を発表している（大浜・王, 2006: 198）。

川口・蒲谷・坂本（1996）では、日本語において目上を褒めるという言語行動が失礼になる理由として、(i) 目上に「感情伝え」を行うこと、(ii) 適切な立場にないのに評価を下すことの二点を挙げている（川口・蒲谷・坂本, 1996: 18）。

これらのことから、一般に日本語母語話者が、他の言語の話者に比べて「ほめる」という言語行動を重視していることと、目上の者への評価につながる「ほめ」行動は行いにくい傾向にあることが既に明らかにされている。

2.3. 日本社会における「ほめ」行動に注目した研究

2.3.1. 川口・蒲谷・坂本（1996）

「待遇表現としてのほめ」では、ほめ行為を待遇表現の中に位置づけて考察したものである。この研究は、「ほめ」行為をポライトネスの観点から分類するものだと考えられ、重要先行研究としてとりあげた。日本語学習者が教師の授業の進め方がよいと感じ、「先生の授業はとてもよかったです。」あるいは「素晴らしいです。」などとコメントした場合、教師によっては、その「ほめ」が善意からだとは分かっていても、快くない感じを持つことがある。このような問題は、コミュニケーションや人間関係に支障をきたす恐れがある性質のものであり、語用論上の教育を実施する際に注意すべきこととなる。

「ほめ」の「待遇表現としての基本的な構造」の解明とは、「どういう相手を・どういう場に・どういう内容について・どういう表現方法で」ほめるかを考えることであり、更にそのような表現行為を通して、「どのような意図を」伝達しようとしているのかということが指摘される。

また、「ほめ」行動には以下のように、性質の異なる二種類のものが

ある。一つは「実質ほめ」である。相手自身、相手に関するものごとなどについて心から高い評価を表現したいときのものである。つまり、本當をほめたくて、その気持ちを相手に伝えようとする「ほめ」である。これは、「感情・意思伝え」ともいえよう。

もう一つは「形式ほめ」である。実際に評価してほめるというよりは「相手との関係を良好に保つ」というような意図のもとで行われることが多い。これらの「ほめ」は通常「お世辞」「お愛想」ととられるが、その対象のものや表現などについて「実質ほめ」と共通するが多く、「ほめ」の一種類として論じるのが適當と考えられる。「形式ほめ」が行われるのは、「会話を発展させたい」「苦情や批判を言いたい」「頼みごとをしたい」のような表現意図を伝える前に、相手との積極的な、好意的な関係を示したい場合である。つまり、相手との関わり方についての態度が伝わることが主要な目的の表現であり、「表現形式伝え」ともいえよう。

「実質ほめ」「形式ほめ」それぞれの構造を、「相手」「場」「内容」「表現方法」「表現意図」の側面から検討することを前提して、以下のように分析する。

(i) 相手

「実質ほめ」は「感情伝え」であり、この場合は個人的に親しい人々に限定される。初対面の人、目上の人などには「親しさ」を直接的に表現することが不適當だと考えられる。特に「目上に『感情伝え』を行った」点と「適切な立場にないのに評価を下した」と二点で、相手に不快感を起こす恐れがある。

これに対して、「形式ほめ」は、「目上を評価する」というような大きなルールを犯さない限りでは、対象となる相手の範囲が拡大する。

(ii) 場

「実質ほめ」ができるのは、親しい者同士のプライベートな関係を軸として展開する場である。例えば、女子学生が学校で親友と会ったときに、その親友の髪型や装身具をほめるような場合であれば、「実質ほめ」がストレートにできると考えられる。

一方、「教師」と「学生」というような社会的役割の下で、「実質ほめ」はできず、あえてする場合は相手の社会的役割を容認せず、プライベートで親しい関係を共有しようとしているような印象を与えるかもしれない。

(iii) 表現内容

自分に相手を評価できるだけの知識・経験・技量がないことについては、「実質ほめ」「形式ほめ」ともにすることが難しい。学生が教授の授業技術をほめると失礼であることは、そのためである。

一方、相手の専門でないことなら「実質ほめ」でも可能なことがある。例えば、中国人の留学生が教授の中国語力を「実質ほめ」として考えられる。その場合には教授側の意識では、学生と自分の関係が「中国語ネイティブ」と「中国語ノンネイティブ」であり、「知識がある者から好意的なコメントを与える」と認識しているからである。つまり、表現内容により、相手は目上であっても、「目上」への「ほめ」は可能である。

(iv) 表現方法

「実質ほめ」は使用する制限は多いが、初対面、親しくない間柄、目上などについては全く行えないというわけではない。表現方法に工夫をすれば可能である。

その一つは、「先生の授業がよかったです」型の表現は、「実質ほめ」を避け、「先生、今日の授業はたいへん勉強になりました。」「これまで分からなかつたことが、今日の授業でよく分かりました。」というような表現にすれば、はるかに受け入れられ易くなり、「実質ほめ」をしているのと同じ伝達効果を生むことができる。これは、「感情伝え」を「情報伝え」に換えて表現したものである。要するに、目上のような相手がいる場では、伝えるべきことを「自分への恩恵」として表現した方がより効果的なのである。

(v) 表現意図

「ほめ」は何を意図して行われるのだろうか。「実質ほめ」の場合、表現意図の特定はそれほど難しくない。それは、表現主体と相手との関係が「実質ほめ」のできる間柄であることを示すことであり、またその関係を維持・強化することである。相手は「ほめ」を受け入れ、次の機会には相手をほめ返すことで関係の維持・強化に積極的に参加する。

一方、「形式ほめ」の場合は、様々な表現意図が考えられる。ただ単に相手との話すきっかけを作りたいというようなものから、ほめちぎることまで様々であり、その特定の文脈の中で分析していくしかない。しかし、最終的な意図は、さしあたり「コミュニケーション上の交渉を持ちたい」という「相手に対する配慮」を表明することであろう。

このような待遇表現としての「ほめ」構造を示すことにより、どうい

う相手を、どういう場に、どういう内容について、どういう表現方法を現すかについて系統的に認識が可能になった。(川口・蒲谷・坂本, 1996: 13-20)

2.3.2 大野（2003, 2005, 2009a, 2009b）の研究

大野（2003）は、「ほめ」を「相手自身、あるいは相手に関連する『よい』と認めうるものごとについて、明示的あるいは暗示的に肯定的評価を与えることによって、相手への好感情を表す言語行動」と定義した（大野, 2003: 337）。

また、大野（2003）によれば、この「ほめ」により、相手が目上であっても、方法や表現形式の工夫によって「肯定的評価」や「好感情」の伝達が可能となるとしている。

目上に対して「ほめ」意図を実現させる際の方法は、「誰についての言及なのか」という観点から、①相手、②「ほめ」主体、③それ以外の第三者に分けられる。大野（2009）による調査で得られた回答結果によると、この観点を軸にした「ほめ」の方法がさらに 12 種に細分類することができるという。以下ではその一部を紹介する（大野, 2009:63-64）。

①相手への言及というのは、「直接的に相手を評価する」または「客観的に相手事実を述べる」という方法のことである。例えば、「先生のご主人はやさしい」（直接評価）や「先生は分かりやすく教えてくださった」（相手事実）がその例となる。

②「ほめ主体」自身についての言及というのは、同じ事実でも、「ほめ主体」自身に引き寄せて言及することで、「ほめ」の評価性を弱くする方法のことである。「ほめ主体事実」、「感情」、「羨望」、「意志」、「感謝」などのバリエーションがあるが、例えば「私なんかでは、なかなか先生みたいにはできません。」（ほめが主体事実）、「素晴らしいね」（感情）、「いいなあ」（羨望）などの表現が具体例となる。

③第三者についての言及というのは、「ほめ主体」や相手以外の第三者が主語になる場合である。例えば、「みんなも興味を持ちました」（第三者事実）がそれにあたる。

これら 3 つの方法以外に、質問、ねぎらいや無言などの形式的表現も取り上げられている。例えば、「お疲れ様です」などの慣用表現がその例である。

以上、簡単に大野の研究を紹介したが、これを基礎にして、「ストレートほめ」と「間接ほめ」の意味付けをすると、ほめ対象により、①相

手への言及は「ストレートほめ」のカテゴリーに入り、②「ほめ主体」自身についての言及および第三者についての言及は「間接ほめ」のカテゴリーに分類されると考えられる。しかし、③第三者についての言及の範囲は具体的にはどのようなものか、まだ明確に規定されていない。とりわけ、言及された第三者は実際のコミュニケーションに参加しているかどうかを、「引用する形」(参加していない場合)と「紹介する形」(参加している場合)に分類可能であろう。今後の研究では、こういった観点からより厳密な分析が必要だと考える。

4. まとめ

相手を評価するという本質を持つ「ほめ」行動に関する先行研究では、目上に対する「ほめ」行動の特徴を十分に記述しているとは言えない。「ほめ」構造の研究も、目上への「ほめ」の方法において、「ほめ」のあり方を大きく捉えるには有益であるといえる。しかし、これまでの研究では、「ほめ」行動の表現者および表現相手である目上との関係があいまいにされていることが分かった。その間に生じる「ほめ」行動にも違いが見られる。例えば同じグループに分類された「ほめ」でも、挨拶のような軽いものから、心から感心、感謝しながら行うものがあったり、また、目上の相手への「ほめ」と一括しても、その相手は、部活の先輩から普段は言葉を交わせないような社長まで程度にも差がある。

「親疎関係」または「利害・評価関係」に分け、それぞれ互いの複合的関係を想定し、それらの場合の「ほめ」のあり方について調査する研究を提案したい。

その上で、以下の4点についても留意し分析する。

1. 「ほめ」内容（対象）は、大野（2003）に基づいて、日本語の「ほめ」を①「持ち物」、②「能力」、③「家族」、④「性格」の4種類に分け、それぞれの表現方法や表現形式を分析する。「ほめ」内容（対象）により、表現方法や表現形式も変わると考えるからである。
2. 言及主体の違いにより、「ストレートほめ」と「間接ほめ（紹介する形）」の意味付けを検討する。
3. ジェンダーによる「ほめ」行動の出現頻度の相違を明らかにする。「ほめ」行動の男女差はその他の言語行動より顕著であることが予想されるからである。

4. 日本語母語話者と中国語母語話者との表現の違いにより、各々の特徴の比較を行う。大野（2009a）も指摘しているように、日本語母語話者と日本語学習者とのほめに関する「方法」や「表現形式の工夫」は大きく異なるからである。

以上のような調査・分析を行うことによって、限られた条件はあるものの、日本語母語話者は目上に対して積極的な「ほめ」のストラテジーを駆使していることが実証されると考える。

参考文献

<英語>

- Brown, P. and S. Levinson (1987). *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Herbert, R. (1990). "Sex-based Differences in Compliment Behavior", *Language in society* 19, 201-224.
- Holmes, J. (1986). "Compliments and Compliment Responses in New Zealand English", *Anthropological Linguistics* 28(4), 485-508.
- Holmes, J. (1988). "Paying Compliments: A Sex Preferential Politeness Strategy", *Journal of Pragmatics* 12, 445-465.
- Holmes, J. (1995). *Women, Men, and Politeness*. London: Longman.
- Wolfson, N. (1983). "An Empirically Based Analysis of Complimenting in American English", N. Wolfson & E. Judd (Eds.) *Sociolinguistics and Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury House, 82-95.

<日本語>

- 東 照二 (1994).『丁寧な英語・失礼な英語-英語のポライトネス・ストラテジー』. 研究社出版.
- 母 育新 (2001).「待遇表現（敬語表現）における日本人と中国人の比較—ポライトネスの視点からの考察—」.『麗澤大学紀要』第73巻, 209-225.
- 母 育新 (2002).「ポジティブ・ポライトネスから見た日中比較—日本語教育からの考察—」.『麗澤学際ジャーナル』第10号, 75-85.
- 日向ノエミア (1996).「ほめことばの日伯比較—感謝とほめことば—」.『日本語学』第15号, 50-58.
- 川口義一・蒲谷広・坂本恵 (1996).「待遇表現としての誉め」.『日本語学』第15号, 13-22.

- 熊取谷哲夫 (1989). 「日本語における褒めの表現形式と談話構造」. 『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究(2)』広島大学教育学部日本語教育学科, 97-108.
- 生越直樹 (2006). 「日本と韓国の言語行動対照分析」. 『講座・日本語教育学』, 201-212.
- 大浜るい子・王 晓青 (2006). 「日本と台湾の言語行動対照分析 一他家の食事時の言語行動について」. 町博光編『言語行動と社会・文化』講座・日本語教育学第2巻, 186-200.
- 大野敬代 (2003). 「人間関係からみた『ほめ』とその工夫について 一シナリオにおける『働きかけ表現』として」『早稲田大学大学院教育学研究紀要 別冊』第10号—2, 337-346.
- 大野敬代 (2005). 「『ほめ』の意図と目上への応答について 一シナリオ談話における待遇コミュニケーションとしての調査から一」『社会言語科学』第7巻第2号, 88-96.
- 大野敬代 (2009a). 「日本語母語話者と学習者の目上への『ほめ』のあり方」. 『早稲田日本語研究』第18号, 60-71.
- 大野敬代 (2009b). 「日本語母語話者と日本語学習者の『ほめ』の応答 一表現と意図からの分析一」. 『国際交流センター紀要』第3号, 35-48.
- 大滝敏夫 (1996). 「ほめことばの日独比較」. 『日本語学』第15号, 43-49.
- 瀬田幸人・木田祥恵 (2008). 「積極的ポライトネスにおける『ほめる』行為 一ジエンダーの視点から」. 『岡山大学教育学部研究集録』第137号, 103-114.
- 施 晖 (2005). 「『あいさつ』言語行動に関する日中比較研究 一日本語の挨拶に対する中国人留学生の違和感について一」『広島国際研究』第11号, 245-263.
- 田辺洋二 (1996). 「ほめことばの日・英語比較」. 『日本語学』第15号, 33-42.
- 山口和代 (1997). 「コミュニケーション・スタイルを社会文化的要因 一中国人及び台湾人留学生を対象として」. 『日本語教育』第93号, 38-48.
- 張 紅濤 (2006). 「言語コミュニケーションの日中比較 一日本語の言語表現の特徴についての考察一」. 『異文化コミュニケーション論集』第4号, 111-122.

- 談話における待遇コミュニケーションとしての調査からー」『社会言語科学』第 7 卷第 2 号, 88–96.
- 大野敬代 (2009a). 「日本語母語話者と学習者の目上への『ほめ』のあり方」. 『早稲田日本語研究』第 18 号, 60-71.
- 大野敬代 (2009b). 「日本語母語話者と日本語学習者の『ほめ』の応答 — 表現と意図からの分析ー」. 『国際交流センター紀要』第 3 号, 35–48.
- 大滝敏夫 (1996). 「ほめことばの日独比較」. 『日本語学』第 15 号, 43-49.
- 瀬田幸人・木田祥恵 (2008). 「積極的ポライトネスにおける『ほめる』行為 — ジェンダーの視点から」. 『岡山大学教育学部研究集録』第 137 号, 103-114.
- 施 晖 (2005). 「『あいさつ』言語行動に関する日中比較研究 — 日本語の挨拶に対する中国人留学生の違和感についてー」『広島国際研究』第 11 号, 245-263.
- 田辺洋二 (1996). 「ほめことばの日・英語比較」. 『日本語学』第 15 号, 33-42.
- 山口和代 (1997). 「コミュニケーション・スタイルを社会文化的要因 — 中国人及び台湾人留学生を対象として」. 『日本語教育』第 93 号, 38-48.
- 張 紅濤 (2006). 「言語コミュニケーションの日中比較 — 日本語の言語表現の特徴についての考察ー」. 『異文化コミュニケーション論集』第 4 号, 111–122.